（第四十二号）

関東艮陵だより

東北大学関東艮陵同窓会

平成二十八年度　関東連合総会開催

平成二十八年六月四日（土）、東京・市ヶ谷私学会館アルカディアにて、関東艮陵同窓会（正式には、東北大学艮陵同窓会関東連合会）春季総会が開催された。

当日は関東から二十四人の艮陵同窓生が集まり、和やかに開かれた。

午後四時三十分から、総会が始まり、本年お亡くなりになった庶務・編集担当幹事の根本　宏先生等の追悼の後に、押田会長が「押田体制四年目になり、若い会員の確保が大きな目標になっています。そこで卒業後関東在住と思われる比較的若い艮陵会員に『若い艮陵の会』の連絡を差し上げましたが、今年は本年卒業生が六人参加して盛会でした。今後の課題として、更に継続的に若返り政策を進めてゆきたいと思います」と挨拶した。

次いで、岩瀬幹事長より新体制四年目の経過報告、坂間会計担当幹事より会計報告、会計監査報告があり、会計報告と予算案が承認された。更に田中幹事より女医部会報告があった。午後五時から、飯野正光先生（昭和五十一年卒）より『絶滅危惧種を救う』（後述）との演題で特別講演が行われた。午後六時から、場所を移して懇親会が行われ、アフターディナーコンサートとして、成田博之さんのバリトンの美声に、一同聞き惚れた。出席会員から、近況報告等も行われ、最後に飯野副会長が今後に向けて決意を述べて閉会した。

飯野正光先生の特別講演

飯野正光先生は『絶滅危惧種を救う』と題する特別講演で、国立大学医学部長会議の調査で、基礎医学系大学院に占める医学部卒業生の割合は年々減少していて、このまま行くと、「絶滅」するのではないかと危惧されているということでした。東北大学医学部でも昭和四十年代には、インターン問題でもめていましたが、基礎・社会医学系には十名前後の専攻者がおりました。昭和五十三年には二学年分の百七十九名が卒業、うち基礎・社会医学系には十七名が在籍。その後東北大でも少しづつ専攻希望者が減少しました。これは座視できないとして、東京大学では「ＭＤ研究者育成プログラム」を立ち上げ、医学部のカリキュラムに加えて、基礎医学研究室に所属して研究する機会を学生に与え、各学年の二十から三十名程がこのプログラムに参加、卒業後直ちに基礎系の博士課程に進学する学生も出ております。東北大でもこのようなシステムを企画して、少しでも基礎・社会医学系の研究に興味を持ち、将来の医学部を支える若い医師の研究者が育って欲しいと実感しました。

このような実践的な企画で盛り上がりながら、日本薬理学理事長として先頭を走っている飯野教授には東京大学定年後、日本大学特任教授として更に活動の幅を広げていただき、若い医学生に少しでも影響を与えて頂ければと熱望しています。

東北大学関東艮陵同窓会
会長　押田茂實（文責）

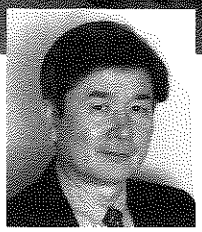
艮陵『若手会』のお誘い

平成二十九年三月十一日（土）飯田橋駅、駅ビル最上階にある、居酒屋『北海道』で。午後六時より『若手会』を開催します。研修や、研究、就職に悩む若手の相談に乗るとの趣旨で開かれます。従って、真の若手（研修医や研究中の方、専門医取得中の方、就職活動中の方）は勿論、大学や病院で新人医師を獲得したい方、など年齢を問わずお集まりください。女医会の方にも案内を差し上げますので、よろしくお願い致します。以前より若手会はあったのですが、一時中断しており、今年で再会三年目です。昨年より平成二十七年卒の真の若手も参加するようになり、今年も新卒の参加を期待しております。年齢を問わず、若手の事に関心のある方は、お集まりください。当日飛び入り歓迎です。

（文責　昭和五九年卒　岩瀬　光）本会幹事長

写真上は、春季総会にご出席の先生方の集合写真
前列右から三人目、会長・押田茂實先生　その隣　副会長・飯野正光先生

飯野正光先生⇒



第十八回　女医部会開催

首題の会は、平成二十八年七月二十三日（土）午後五時から、素晴らしい眺望の六本木のアークヒルズクラブで開催された。まず、押田会長より、五月二十九日に逝去された根本先生へのお悔やみの言葉があり、皆で黙祷を捧げました。

その後、五十八年卒の精神科医、早川東作先生（現・国立大学法人東京農工大学保健管理センター教授）から「学生のメンタルヘルス」について、ご講演をいただいた。

「大学生のメンタルヘルス」とは、全校生の三％程度が相当者であるとの事。その中で自殺したいという願望を持つ学生に、どう接し、それを中止させるかが大切。大学生の情緒問題としては、不登校、引きこもり、対人恐怖症（SAD）、うつ病、パーソナリティ障害、発達障害、パニック障害、心理的発達障害等が根本にある。悩みの多くは、学業研究について、加えて進路、就職、対人関係、経済面などである。このうち八・四％は要留意であり、一・六％は要注意である。このうち診断のつく者は一九％程度で、総合失調症、うつ、不安症、適応障害等であり、これらの原因は、日本人の自尊感情が著しく低い事であるとのこと。

（田中佐喜子　昭四三卒）本会幹事

盟友　根本宏先生追悼　林　泉

根本宏君のこと

余りにも突然の訃報でした。平成二八年六月一日通夜との連絡に茫然としました。亡くなられた原因は敗血症との事。この時代、感染症とは！誠に無念でなりません。今年我々四一年組は、医学部卒業後五十年の記念すべき年で、先日仙台での記念パーティで。林義人君が集まった三十五人の前で根本君の報告をしました。亡くなる前の夜入院先の病院を訪れた時は意識が無く、会話すること無く最終の新幹線で仙台に帰った翌朝四時には訃報の知らせがあったとの事。今の世に感染症で失う事の憤りと無念さを述べ、同級生八十八人中十九番目に亡くなった彼に黙とうを致しました。彼は仲間では幾つか年上だったが、品の良い紳士振りは皆の手本でした。私が東京の病院に勤めることになった時、関東艮陵会の役員になるよう彼に勧められ以来二十七年間一緒にやってきました。音楽愛好家であり、囲碁も強く先日仲間の追悼会があり、そこでの会話の一つ。「彼は笑顔しか知らない」「生涯頭脳明晰」「全て苦難を乗り越える」医学部四十一年卒の仲間で伝説の男として永遠に生きることでしょう。　合掌（昭四一卒）

根本宏先生追悼

N爺とS爺

清水允熙
富士山麓病院理事長
（昭和四十三年卒）

「I」　昔々あるところにN爺とS爺という二人の翁がいました。

その二人の若い頃の昔話を聞いたことがあるのですが、聞いたときも今は昔となりました。どのくらい正確に記憶しているかは保障の限りではありません。

さて、N爺、S爺の若い頃の話なので、それぞれN、Sと略します。

あるとき、NはSに言い出しづらそうな顔をして話かけました。

「君、困ったことになったんだ」

「Nさん。どうしたんです」

「一人の女性と約束していたんだが、今朝、突然別の女性から連絡があって、そちらに行かなければならなくなってしまったんだよ」

「Nさんは、モテルのですねぇ」

「そんなことないよ…」

「それで、僕にどちらかの女性に付き合って欲しいということですか」

「最初に約束している人がね。東京から来るので、駅に迎えに行き、会って欲しいのだけと…白いブラウスを着て、手に本を持っているので分かると思う。名前はDさん、年齢は二十四歳かな」

「DさんはNさんの恋人ですか」

「いや、そんなのではないよ」

「それでは、Nさんが会いに行く人が恋人ですか」

「それも違うよ。君は何故僕の女友達を僕の恋人にしたがるのかなぁ。でも、本当のことを言うと微妙なんだよ。その辺は」

「では、二人とも恋愛前駆期の関係みたいですね」

「そうだ。未完成恋愛前駆期だ。片想いの状態だから…」

「でも、羨ましいですねぇ。未完成恋愛二重奏は…」

「Nさん。では行ってきます。駅で午後一時三十分ですね」

「II」　その日の夕食後、SはNに報告した。

「Nさん。あなたは立派ですね。Dさんは『Nさんによろしく』と言っていましたよ。そしてDさんと約束した日にNさんが来なかったのは、今回で三回目だと言っていました。

そして一回目には何故か不安が強くなりました。二回目ときに別れの予感ができました。三回目は、今回ですが、これでお別れでしょう。と思ったそうです」

「また、Dさんは、Nさんのことを今まで会った男性の中で、最高の人だったと言っていましたよ。Dさんもなかなか良い学歴を持っている人ですよね。そのDさんに誉められたのだから、Nさんも立派なんですね」

「また、Dさんはこうも言っていましたよ。NさんはDさんの為になることなら、労をいとわずしてくれた。何か頼めば夜を徹してでもしてくれた。Dさんの祖母が病気のときも、親身になって病院まで付き添ってくれたと。Dさんの両親もNさんに好感を持っていてくれたようです。Dさんの母はDさんがNさんと結婚することに賛成してくれていたそうですよ。しかし、Dさんは、若かったのでしょう。仲間の影響から、結婚相手に求めた条件は、芸術家、それも絵画、作家として能力のある人だったようです。また、それらしい人も出現したようです。Dさんは『私には音楽は理解できない世界なの』と言っていました。その他には経済界で活躍できる環境にある人が目標だったとのことでした。Dさんにとってはどんなに素晴らしい優しさでも、愛でも、それだけでは平凡にしか見えなかったのです。そんな私にNさんは、納得できなかったようでした。『ごめんなさい。もう、お会いすることもないでしょう。素晴らしい、素晴らしいNさん！おしあわせに！』とのことでした」

「III」　「Nさん。先日、僕がNさんの代わりに会いに行ったときに、Nさんが会った人と上手くいってますか」と、Sは聞きました。

この頃、Sは数日間で五kgも体重が減るほどの失恋をしていました。このようなSを元気づけるかのように、Nは自分の失恋の話をしたのでしょう。

Nは次のようなことを話しました。

Nは戦争のとき両親をうしないました。父は医師でした。Nは孤児院に入って、そこから小、中学校へ通い、高校は夜間で昼間は働いていました。Nはこの高校の頃に知合った女子学生のAを好きになりました。Nが言うには、美人で優しい女の子であり、その後、Nは大学へ入学したので自分の気持ちを思いきってAに話したら

（次頁に続く）

「私もNさんが好きよ」
と言われて、嬉しさが込み上げてきたNは有頂天になってしまいました。
NはAにこう言いました。
「卒業するまで七～八年苦労させるけど、その後は必ず君を幸せにする。それまでは時々会いに来るから、君も会いにきてね」
この言葉で二人は将来の結婚を約束しました。最初の二～三年は会う度に二人の愛は強くなっていくように思えました。
しかし、交際して三年後のある日、AからNは突然にこう告げられたのです。
「ごめんなさい。Nさんと一緒になれなくなったの」
「どうして？何故なの。何かおこったの」
しばらくうつむいたまま黙っていたAが独りごとのように言いました。
「約束を無かったことにして、サヨナラしないといけないの。ゴメンナサイ」
彼女は最後に泣きながら、そう言うと駆け出して行ってしまったのです。あまり突然のことで、驚いてしまったNは後を追うことも忘れてボーッと立ちすくんでいただけでした。
「どうしたのだろう」
今でもNは、そう思っています。
その後Nは美しい女性と結婚しました。子供も三人生まれ、経済的にも恵まれ仕合せな生活を続けて、四十年が過ぎました。
ある日、Nは友人のTに「昔のあの人Aを探したい」言いました。
Tは大変な苦労をしてAを探しだしました。NはTと二人で九州に住んでいるAに逢いに行きました。車中のNはとても嬉しそうでした。しかし、このときAは会ってくれませんでした。帰りの列車の中で意外にNは元気でした。
「何故？」Tの問いにNは
「僕はAさんが住む街に来て歩けただけで幸せを感じたんだよ」と答えました。男は同時に二人の女性を愛することができる生き物のようです。妻と本当に好きだった恋人の二人をです。Nさんがそうかも知れません。
しかし、一人の女性しか愛せない人もいるようです。
好きになった女性が、いつも心の中にいるため、他の人と結婚しても、離婚してしまうような人のことです。

「Ⅳ」 NとSは仲がよかったから、よく議論をしていました。NはSに対して紳士的であり、非常に西洋音楽について詳しかったので（特にモーツァルト、バロック音楽、マタイ受難曲、メサイア、ブラームス、そしてヴァイオリン曲全般など）Sはいつも尊敬の念を込めてNと語り会っていました。Nに対してSはベートーベン、その他の作曲家の作品を少々しか知っていませんでした。そしてSのめくら蛇におじずの滅茶苦茶な考え方にNはよく耐えて相手をしていたそうです。
Sはアルバイトなどで、Nの世話になっていました。Nは、効率の良いバイトを自分は我慢して、Sにまわしていたようです。
Sはよほど助かったのでしょう。
とても義理に感じていたようです。そのためか、何かの会で議論のとき、Nが間違って白を黒と言い間違えました。すると、Sは白が黒であることを成立させる考え方を主張して、引き下がりませんでした。そのためSは多勢の人たちに心良く思われなかったという噂もありました。Nにもそのとばっちりがあったと思います。しかし、そんなことはNもSも気にしなかったようです。
ところで、N爺がある頃からベートーベンのエピソードを引用して「こんな生き方で良かったのだろうか？」と、時々S爺に言っていました。S爺は「僕のアルバイトを聞き入れてくれた分だけは良くなかった」と答えていました。そしてN爺が亡くなったとき、S爺は次のようにつぶやいていました。
羯諦羯諦（ぎゃていぎゃてい）　波羅羯諦（はらぎゃてい）　波羅僧羯諦（はらそうぎゃてい）
菩提薩婆訶（ぼじそわか）（註・般若心経最後の節）
S爺は、川の彼岸と此岸の間が狭まり、しかも、水の流れない時がある。その時は、誰でも行き来が出来ると訴えていたようです。
S爺が亡くなってから三十年が経ちました。もう、誰もこの二人の翁を知っている人は居なくなりました。

＊本年度（平成二十八年）年会費三千円を同封の振込用紙により、ご納入をお願い致します。今春にお振込済みの方は二重振込みにならないようご注意ください。

東北大学良陵同窓会
関東連合会　東京支部
〒247－0072
神奈川県鎌倉市岡本
二－二－一－七〇四
TEL&FAX
〇四六七－四五－〇二八七

「関東良陵だより」四十二号
平成二十八年十一月一日発行